

Leader's TOPICS

海水温上昇による海中生物の変化



会員 松原洋一

近年、地球温暖化による気温の上昇と共に海水温の上昇による自然現象の変化についてよく耳にします。台風の大規模化や漁業への影響などです。漁業への影響では暖水を好むサワラが北の海で獲れたり、冷水を好むイワシやサンマが不漁だったりします。また、海のゆりかごと呼ばれるカジメなどの海藻類が枯死し、それらを餌としているアワビが壊滅したりしています。



一方、黒潮に乗って回遊して来る熱帯性の魚は快適に感じていると思います。このように南の海から回遊してくる魚を以前は死滅回遊魚と呼んでいました。かわいい魚なのに死滅回遊魚と呼ぶのはマイナーなイメージなので近年になり季節来遊魚と呼ばれるようになりました。これらは夏から秋にかけて流れ藻等と一緒に卵や幼魚が黒潮に乗ってやって来て夏の暖かな海で大きく成長します。しかし、暖かい海で成長したこれらの来遊魚は冬の寒さに耐えられず死んでしまうため死滅回遊魚と呼ばれていました。生物学的には無効分散といえます。



ところが、近年の海水温の上昇に伴い越冬する来遊魚が見られるようになりました。皆さんもご存知のスズメダイ科のクマノミ等は通年見られるようになりました。伊豆では越冬だけでなく産卵するクマノミも確認されています。熱帯性の魚の生死を分ける海水温はセ氏 15 度といわれます。年間で最も冷たくなる相模湾の2月の平均水温は過去 30 年ほどの間に1度近く上昇し、15度

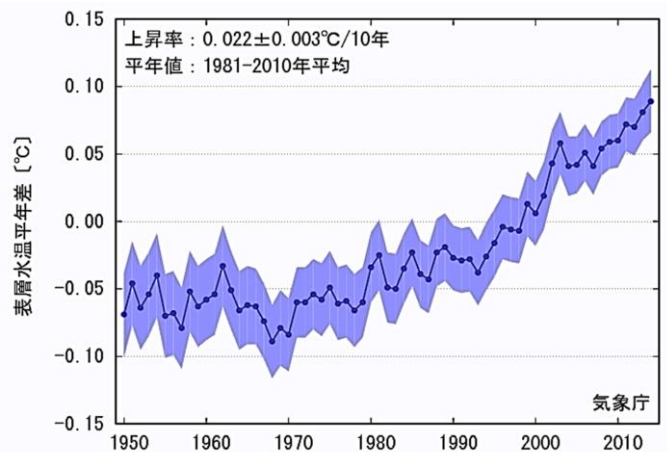
に近づきました。あと1~2度上がれば、海の中の様子が劇的に変わる可能性もあるといえます。



また、国立環境研究所地球環境研究センターが日本の8海域を調べたところ、サンゴの分布が海水温上昇に伴い北上していることがわかったそうです。拡大スピードは年に14キロメートルといわれ、千葉でも最近、館山より少し外房側でサンゴが見つかりました。



身近なビーチにいる熱帯性の生きものたち。未来の相模の海は南国の海のようになっているかも知れませんね。



表層水温平年差の推移 © jma.go.jp

全球海面から700m深まで平均した表層水温平年差。年平均平年差を実線、解析値の95%信頼区間を陰影で示します。